

【研究ノート】

日本画制作における「桜」の表現の考察

—自作の原点を探る試み—

藤崎 いづみ

キーワード：古典絵画、技法、胡粉、意匠、陰翳、スケッチ

1. はじめに

本稿は、筆者の専門領域の日本画制作における、主なる画題「桜」をテーマ・モチーフとした制作の経緯と、これまでの作品・作風の振り返りと、テーマと技法の探求と考察を明らかにする。概要は以下である。

日本の古典絵画に根ざした手法と、新しい表現への試み。宝相華文様・縹綯彩色模写研究からスタートし、琳派¹⁾を意識した表現方法論に向かう。日本文学作品の文体に綴られている様式美と色調から、制作へのイメージーションを探り、自然物の観察と造形美から創作の源を抽出する。一連の考察を通して、制作遍歴と自己作品履歴書として記述したいと思う。



藤崎いづみ作品①『さくら』紙本彩色 72.7cm×100cm 高級日本料理店「赤い花」所蔵(米国)

2. 表現と技法

—酒井抱一の『四季花木図屏風』と筆者の『四季の彩り』—

筆者は室町時代、安土桃山時代、江戸時代の屏風・絵巻物の「桜」をモチーフとした名作に影響を受け、筆をすすめてきた。それは、琳派や狩野派の表現精神を受け継ぐことであり、そこからオリジナルの作風に展開していく試みである。ここで、「桜」と「四季」をモチーフとして融合させた酒井抱一²⁾の『四季花木図屏風』を引用する。



事例①『四季花木図屏風』酒井抱一筆 / 江戸時代 172cm×264cm 島山記念館所蔵

金地の大画面右上に大胆に咲き誇る桜。計算された構図の画面下には、優美で繊細な草花の姿が在る。季節を飛び越えて咲く花々は、現実の自然の摂理では存在しない風景である。しかし、真の自然界のバランスとリアリティが調和している一作であると考察する。

筆者はこの様な古典絵画の構図と色感、表現方法を追求し自身の作品に活かした。

筆者の『四季の彩り』をとり上げる。この作品の基本のデザインは、日本的な古典的な考え方の上に、現代的な自身の表現したい、伝えたい、という考えを描いた。制作過程として古典絵画の造形美・色彩美をスキャンし、自らの表現に出力していくプロセスを展開している。画面の地紋として桜の花を配置し、そこに四季の花々を彩り装飾的に画面配置した。琳派を意識して画風に取り入れ、その上で現代的で斬新な世界観をめざした。



藤崎いづみ作品②『四季の彩り』紙本彩色 90cm×220cm 赤坂 DS ビル特別会議室所蔵

—制作上の方法論と技法—

筆者は常に、日本画の技法を丁寧に駆使し主題をどう見せるか、というこだわりを中心に筆をすすめている。大学院生時代に受講した講義『日本文様史』担当のおおばつねきち先生からは以下のような教えがあり、それは宝相華文様・縵彩色模写研究課題³⁾からスタートした。

宝相華文様は忍冬文様⁴⁾と並び世界2大文様であり、その彩色を縵彩色という。宝相華はぶどう・ざくろ・牡丹の花の理想的形態を様式化し、浄土教の流行によってその形態が変化し、平安時代後期、宇治の平等院鳳凰堂に描かれた頃、最も理想的な美しさを形成し造形的に絶頂期を迎える⁵⁾。

この様に、自然物は様式化され美の歴史や世界を彩ってきた。装飾様式文様は重要なデザインの範疇であり、日本の美術の歴史は、生活を彩る装飾意匠美の歴史である。宝相華文様・縵彩色模写研究課題は、古典芸術の自然物をモチーフにした造形色彩美を習得でき、同時に岩絵の具の技法の手ほどきの「和紙に岩がのせられる」技術を、効果的に学ぶことが可能である⁶⁾。

これを経由し、面と線で創られる写実描写に辿り着く。画面の枠の中でモチーフの輪郭のとり方を工夫し彩色し、はつきりとデザインし、表現する。それは、明解で様式意匠的な画面構成であることや、絵の具を重ねていく「たらし込み」⁷⁾や「滲み」の効果による、技法の妙から画面を成立させることである。琳派の持ち味である意匠的な描き方を丁寧に追求していくことは、日本の美術の特徴を把握でき、デザイン的である。



藤崎いづみ作品③『宝相華文様・縵彩色模写研究課題』
紙本彩色 52cm × 35cm 部分図

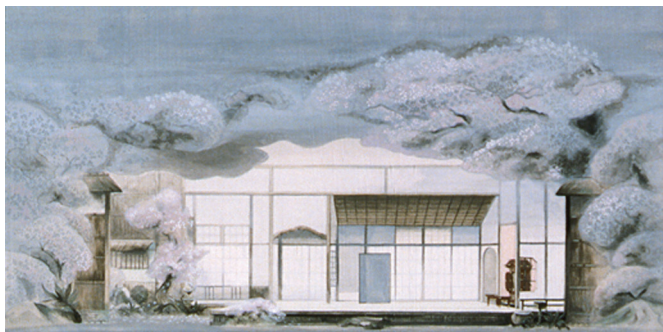
3. 桜の表現における白「胡粉」の位置づけ

日本画材、岩絵の具において、白「胡粉」⁸⁾の美しさは特徴的である。それは白の色合いが深く、肌理の細かい透明感のある質感である。

筆者は「たらし込み」技法による筆さばきや、胡粉と色を混色した際の色合い、鮮やかさで描くことを愉んでいる。又、具墨⁹⁾は様々な広がりを作り出すことが可能である。白を気品あるグレーに変化させ、色に深みを加えるのである。

筆者は武蔵野美術大学在学中の恩師、三林亮太郎先生¹⁰⁾からの以下の教えを大切にしている。「桜の花びらの色は白です。」これは、筆者の「桜」の白への色彩のこだわりの記憶である。それは自然界の美しい中間色を観察すること。自然の色の複雑さ、繊細な自然

の造形色彩美を学ぶことが大切である、という教えであった。そして、三林亮太郎先生作品の『オペラ蝶々夫人舞台美術デザイン「第二幕 蝶々さんの家の中」』は、遠近画法によるデザインで、桜に囲まれている建物の空間が幻想的で翳りがあり、美しい一作である。



事例②『オペラ蝶々夫人舞台美術デザイン』三林亮太郎 /1961年 武蔵野美術大学美術館・図書館所蔵

その後、東京芸術大学大学院の恩師の手嶋有男先生¹¹⁾からは以下のように教えられた。「桜の色はグレーです。さみしい花です。」筆者が「桜」の大作の『相模原の桜』（6. WORKS 具体的制作事例で後述の作品、藤崎いづみ作品⑩）を制作中に、手嶋先生がご指導されたと記憶している。桜の色相に関する、ひかえめな陰翳の美意識である。

又、白色は光と陰、様々な色を映し出す。白は色として充実し、空でからっぽ、という広義な美しさから成り立っている。この様に考察される、日本画（岩絵の具）の基本色の胡粉の白が主役になるのが「桜」の絵画描写である。そして、筆者が2000年制作の『桜』では、花の色は白で描き、背景を桜色に仕立てた。バックとモチーフを反転させる表現意図で、背景をピンクで上品に、花映えを感じさせる色の効果をねらったのである。



藤崎いづみ作品④『桜』紙本彩色 15.8cm × 22.7cm ザ・プリンスさくらタワー東京『高輪 七軒茶屋』所蔵

4. 日本の「粹」な色

ここでは、日本の色について記しておきたい。次の作品は背景に、一日の時間の経過の表現を試みた。一日の時間の流れを表象する背景の色によってデザインしている。



藤崎いづみ作品 上から⑤『さくら(朝)』⑥『さくら(陽)』⑦『さくら(宵)』紙本彩色 15.8cm×22.7cm

ところで、近年、江戸観光文化の象徴として、東京スカイツリーや東京ゲートブリッジのイルミネーションは、夜の闇に光の色を幾重にも演出している。柔らかい中間色の日本の現代的な美観を愛でている風情がある。ゆえに、日本の色は「粋」で心が安まる。その「粋」の定義は、艶があり、さらりとしている心地よさと捉えたい。それは、日本画材、岩絵の具の質感といえよう。又、教育面でも日本の色は重要視されているのである。

2012年度から使用の中学校美術教科書として申請合格した3社の教科書には、日本美術の内容が増加され、日本の伝統色一覧が掲載され、風神雷神図など日本画という自国の文化を重視する傾向が見られる¹²⁾。

様々な日本の風雅な色の美しさは、数千年前から積み重なって、現代に移行してきていると思われる。

5. 制作における文学作品からのイマジネーション

筆者は大学院生時代に谷崎潤一郎の文学作品から、美感や趣をイメージして、装飾的絵画としての花の連作を、必死に制作した。それは、制作活動の初期の頃スケッチ体験した花々、牡丹・菖蒲・百合に始まり「桜」へ繋がっていく。先ず、修了制作では以下の連作『花王』『雄志』『艶姿』を仕上げた。



藤崎いづみ作品 左から⑧『花王』⑨『雄志』⑩『艶姿』紙本彩色 168cm×86cm 東京芸術大学所蔵

この作品においては、谷崎文学の表現から制作の情感を高め、筆をすすめた。それは、『刺青』という作品の、若い刺青師が魂をこめて人の肌に絵の具を注ぎ込む姿であり、妖艶な線や技を駆使する表現は、絵描きとしての本能的な感性と情熱を連想できた。これらの文

体を筆者は自身の心に包みこみ、画面と向き合った。筆者は音楽を聴きながら制作はしない。つまり、言葉のイメージが制作のバックグラウンドミュージックとなっている。

思うに、谷崎潤一郎の小説や日本の純文学は、文体に様式美と色感を連想させる。極めて日本的なデザインや図案的なビジュアルが綴られているのは、『卍』という作品である。以下は、小説の文中のラブレターの便箋・封筒の表現である。(谷崎潤一郎『卍』)

封筒縦四寸横二寸四分。図は横に画いてある。緋色の地に鹿の子絞りのような銀の点線が這入っていて、下に大きな桜の花弁の端が三枚見え、その上に後姿の舞妓が半身を出している。緋、紫、黒、銀、青の五度刷りの最も色彩の濃厚なもの。

これは、日本のグラフィックデザインのルーツとも読みとれると思う。思うに詩感のある花が「桜」で文学的な印象がする。

以下も「桜」の情景として参考に愉しめる。(谷崎潤一郎『帮間』『刺青・秘密』)

丁度向島の土手は、桜が満開で、青々と晴れ渡った麗らかな日曜日の午前中から、(中略)もやもやとした藍色の光りの中に眠って、その後には公園の十二階が、水蒸気の多い、咽せ返るような紺青の空に、朦朧と立っています。

そして、究極の日本の内在する美の本質の考察と分析の文献としては、『陰翳礼讃』を挙げたい。(谷崎潤一郎『陰翳礼讃』)

美は物体にあるのではなく、物体と物体との作り出す陰翳のあや、明暗にあると考える。夜光の珠も暗中に置けば光彩を放つが、白日の下に曝せば宝石の魅力を失う如く、陰翳の作用を離れて美はないと思う。

これは、日本文化特有の光や陰、淡い曖昧な部分の美意識によりそっている考察と思う。

江戸のランドマーク文献としての、浮世絵木版画と江戸文学の中から、「桜」の造形美を探ることも可能である。葛飾北斎¹³⁾、歌川広重¹⁴⁾、歌川国貞¹⁵⁾他浮世絵師の、桜の風景の木版画作品である。江戸時代には、木版による花見のガイドブックとして『江戸遊覧花暦』¹⁶⁾が出版された。そして、文学では永井荷風の『日和下駄』は東京の絵の様に美しい風景を鑑賞できる。この様に、筆者は歴代の「桜」の名作と小説家の言葉を受容して制作に活かした。



藤崎いづみ作品⑩『初春(小)』紙本彩色 13.9cm×17.9cm

6. WORKS 具体的制作事例

—スケッチと桜空間と桜大樹へ—

スケッチは画家の生命線である。以下は、1993年の筆者初個展での、パンフレットによせた文章からの抜粋である。当時、花の写生への想いを記した。

花と出会うこと、スケッチすることは面白い体験です。うつり変わる自然の姿を、私は力及ばぬながら描きとめておきたいと思います。自然の生命力は、なんと感動的なことでしょうか。人が生きていくことも、自然の生命力も、その前向きなひたむきさは力強く官能的に感じます。植物はその生涯が短く、より凝縮した力を見せてくれ、いつの日か私は、そんな花々の艶姿に魅了され、写生をするようになりました。(中略) 実に色々な花が咲いています。凛としたもの。高貴なもの。それぞれの花の姿を私独自の方法で装飾様式化してみました。それらは実に楽しくもあり、苦しくもあり、悪戦苦闘の面白さでした。

そして、その後も変わらず筆者は花（桜）を追い続けている。それは、うつろいゆく季節の中で、物の本質（自然の生命）を見据えることである。



藤崎いづみ作品⑫『桜スケッチ』

とりわけ、日本の美術の歴史は装飾美術の歴史・デザインの歴史でもある。デザインとは物を最も良く、美しく見せるバランス感覚の統合であり、それは写生による体験から修学可能である。

筆者にとり、鎌倉山の桜並木でのスケッチは、空気をつかめた桜空間での体験であった。これは、桜の表現としての白（胡粉）を基調とし、花びら一枚一枚の造形を描く事。と、花の集合体の朦朧とした色調が作り出す、桜トーンを描く事。この、双方の描写の融合に繋がった。（藤崎いづみ作品⑬）それから、めぐりめぐって、そしてたどり着いたのが『相模原の桜』（3. 桜の表現における白「胡粉」の位置づけで前述の作品）の制作である。

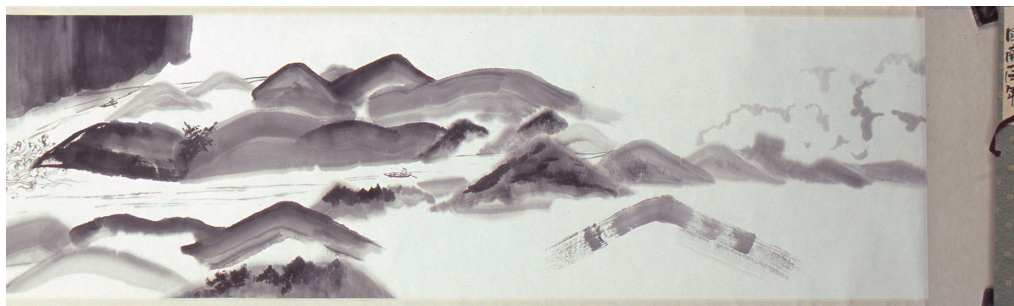
これは、大学近隣のお寺の境内の桜の大樹がモチーフである。筆者が桜美林大学に赴任した際、バス通りまで咲きこぼれる枝振りの豊かさに魅了された。春に満開をスケッチし、真冬に樹の骨格をスケッチして作品に仕上げた。現在は枝が切り落とされ、この桜の本来の満開の姿は、二度と見ることはできない。（藤崎いづみ作品⑯）物の本質を見据えた桜との出会いであった。ここで体験した、物が在ることの意味をみつめること。今後は、これをさらに考えていく様に、スケッチと向き合っていければと思う。



藤崎いづみ作品⑬『初春の鎌倉山スケッチ』

—映像の中の桜『図南百年』—

2007年に筆者は、映像関係の仕事に関わった。内容は企業プロモーションDVD（株主総会などに上映する）に筆者の水墨画作品がCGで立体化され、その上にチェリストが、筆者作品のイメージで作曲した音楽を演奏する、という複合的作品であった。その映像で、優美な音楽の調べにのせ、川沿いの桜並木が枝から徐々に、満開に展開していくアニメーションが成立した。これは、動く絵巻物である。描いた水墨画はカメラのフレームに合わせて、枯れ枝の桜並木が川に沿って、空気遠近法で右から左へ狭まっていく画面と、次第に、桜が一コマ一コマ開花していく画面とを合わせて、動画としての変容が完成する。カメラワークの中での桜の描き方、桜の咲き方を体験したのである。これは、藤崎いづみ作品⑤『さくら（朝）』、⑥『さくら（陽）』、⑦『さくら（宵）』（4.日本の「粋」な色で前述の作品）で、時間の流れを背景の色の違いで表現することから、メディア・アートへ転じていった、といえよう。この映像の全体のストーリーは、横山大観¹⁷⁾の生々流転¹⁸⁾をイメージしたい、との監督からの指示であった。それは、霧深い山間から小さな2艘の舟が、それぞれ2つの細い川を下り、川は合流してやがて一艘になり、溪合いから紅葉に染まる川を下り、街に入る。そして大海へ出航する。2つの石油開発会社の合併に伴うDVDで、最後は舟は帆船となり、地球上のアラブの石油地域から宇宙へと、そして南十字星へと進む、という展開である。自分の作品に、時間と音楽とストーリーが加わり、新しい桜描写の可能性を体験した。筆者の制作要素にメディア・アートがおとりてきたのである。数十年前には予想出来なかった、情報化革命によるコンピューター技術の発展の恩恵である。



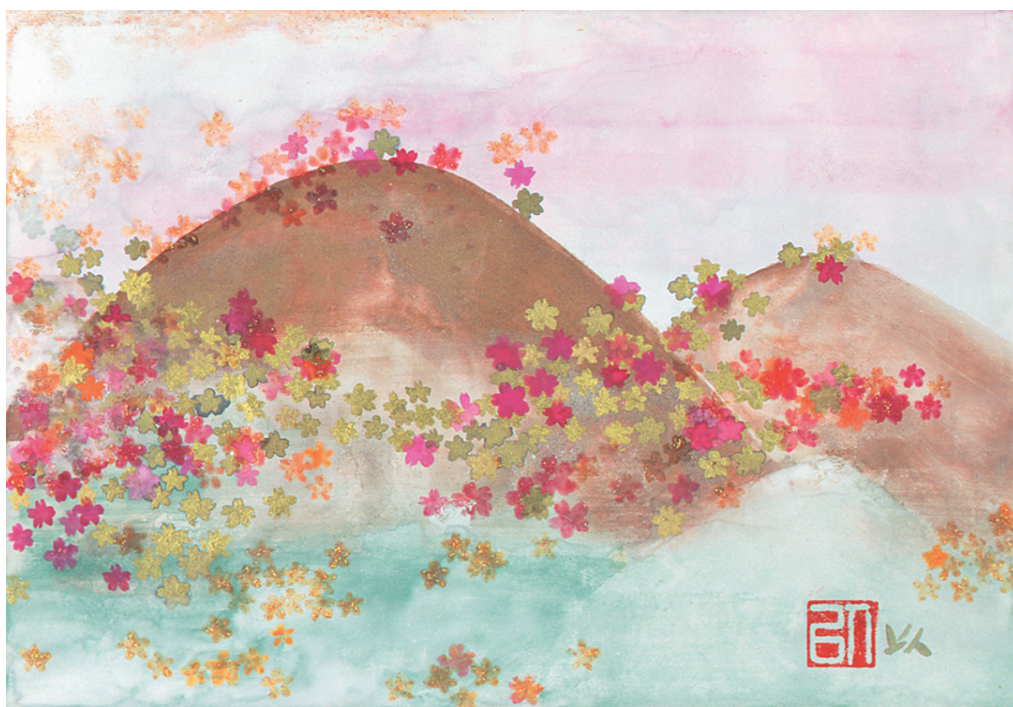
藤崎いづみ作品⑭『図南百年 巻物』紙本墨画 36cm×227cm 企業プロモーションDVDに映像化

7. 結語

今後、筆者は桜美林大学を始め、近隣大学の構内の桜木を、作品題材として追いつけたと思う。筆者には、桜木は各々の大学の校風を映し出した空気感で咲き誇ると、イメージさせられる。桜美林大学には、穏やかに純然と開花する桜が相応しい。北里大学には、生命科学の神秘を漂わせる桜が咲くかもしれない。その様な教育機関の桜木が織りなす情景を描きたいと思う。

桜の木のイメージは「さくら さくら。おかのうえ。」というフレーズがもたらす、国語の教科書で最初に出会う鮮明な記憶と重なってくる。桜は日本の象徴として、平安時代の頃から描かれている。桜は日本人の精神と重なり、日本の普遍的な装飾美の象徴であるがゆえ、国花として皆に愛されている。

筆者は、「桜」を始めとする花々に振りまわされ、描き続け画力の向上を目指している。桜が好きで追いつけ、桜の名のつく大学で教鞭をとっている、学生の表現力の育成にも携わっている、このご縁にも感謝申し上げたい。



藤崎いづみ作品⑮『初春 (小) 小山田桜台の春』紙本彩色 15.8cm×22.7cm



藤崎いづみ作品⑯『相模原の桜』紙本彩色 97.0cm×145.5cm

註

- 1) 桃山時代後期から始まり、江戸時代後期に栄えた画派。俵屋宗達から尾形光琳、尾形乾山に継承され、酒井抱一、鈴木其一らが隆盛期を極めた。
- 2) 1761年～1828年 江戸時代後期の琳派を代表する画家。
- 3) 筆者が東京芸術大学大学院で指導されたカリキュラムである。
- 4) 古代オリエントで発生し中国から日本に伝わった「すいかずら（忍冬）」のようなつる草の文様。
- 5) 1987年度 東京芸術大学大学院デザイン専攻講義 担当おおばつねきち「日本文様史」資料から抜粋。
- 6) 藤崎いづみ「絵画領域における現代学生への教育アプローチ—総合大学における造形美術教育指導の立場から—」『OBIRIN TODAY 教育の現場から』第12号、2012、参照。
- 7) 絵の具が濡れているうちに他の絵の具をたらし込み、絵の具の滲み、濃淡で得る技法。琳派で表現される手法。
- 8) 日本画材の基本色となる白は牡蠣殻を精製して作られた胡粉を乳鉢で砕き、膠とよく混ぜ、練って白絵の具を作り使用する。
- 9) 墨と胡粉を混ぜたもの。
- 10) 1908年～1987年 日本のオペラ・バレエ運動を支えてきた舞台美術家。武蔵野美術大学造形学部芸能デザイン学科（現在の空間デザイン学科）の創設者でもある。
- 11) 1930年～ 工芸家。元東京芸術大学美術学部教授。
- 12) 前掲藤崎いづみ「絵画領域における現代学生への教育アプローチ—総合大学における造形美術教育指導の立場から—」参照。
- 13) 1760～1849 多数の画号を持ち、独自の画風で風景画・動植物画・歴史説話画などを描いた

浮世絵師。

- 14) 1797～1858 東海道をテーマに描いた浮世絵師。
- 15) 1766～1864 美人画や役者絵をテーマに描いた浮世絵師。
- 16) 江戸名所花暦とも称し、春夏秋冬43項目の花の名所を紹介した木版による出版物。
- 17) 1868～1958 近代日本画家の歴史的巨匠。
- 18) 1923年制作 横山大観の画業の集大成といえる、全長40メートルの水墨画で重要文化財である。東京国立近代美術館所蔵。

参考文献

- ・『與衆愛玩 琳派』財団法人 畠山記念館 2011
- ・『琳派 RINPA』東京国立近代美術館／東京新聞 2004
- ・『尾形光琳生誕三五〇周年記念 大琳派展 継承と変奏』東京国立博物館／読売新聞社 2008
- ・『図解日本画用語辞典』東京芸術大学大学院文化財保存学日本画研究室〔編〕2007
- ・藤崎いづみ「絵画領域における現代学生への教育アプローチ—総合大学における造形美術教育指導の立場から—」『OBIRIN TODAY 教育の現場から』第12号、2012
- ・東京芸術大学大学院デザイン専攻講義 担当おおばつねきち「日本文様史」資料 1987
- ・『【三林亮太郎遺作品を中心に】昭和のオペラ・バレエ美術の一断面』武蔵野美術大学美術資料図書館 1993
- ・谷崎潤一郎『刺青・秘密』新潮文庫 1988
- ・谷崎潤一郎『卍』新潮文庫 1983
- ・谷崎潤一郎「帯間」『刺青・秘密』新潮文庫 1988
- ・谷崎潤一郎『陰翳礼讃』中京文庫 2011
- ・永井荷風「日和下駄」『日本の文学18 永井荷風(一)』中央公論社 1979
- ・三到図書館ニュース第64号 桜美林大学図書館 2009
- ・『花20個展 藤崎いづみ』銀座松坂屋 1993
- ・『特別展 浮世絵—旧松方コレクションを中心として—』東京国立博物館 1984
- ・特別展『横山大観 その心と芸術』図録 東京国立博物館／朝日新聞社 2002
- ・『しょうがっこう こくご 一ねん上』学校図書株式会社 1968

引用図版出典

事例① 財団法人畠山記念館

事例② 武蔵野美術大学美術館・図書館

藤崎いづみ作品① 米国高級日本料理店『赤い花』

藤崎いづみ作品② 赤坂DSビル特別会議室

藤崎いづみ作品④ ザ・プリンスさくらタワー東京『高輪 七軒茶屋』

藤崎いづみ作品⑧⑨⑩ 東京芸術大学